

## 母からの課題

今から約二年前、私は祖母を亡くした。施設に入所していた祖母が肺炎で入院し、そのまま息を引き取るまでは、わずか五日であった。それまで大きな病気をしなかつた人であったため、入院してから四日目に、病院から祖母の容体が良くないという連絡を受けた際は我が耳を疑った。母と共に病院へ行くと、祖母の呼吸は荒く、酸素マスクを着けていたにも関わらず非常に苦しそうであった。そのまま看護師から麻薬の使用についての説明と意思確認を受けた際、母は祖母の顔を見つめたまま「考えます。」とだけ答えていた。そして看護師が部屋を出ると、母は一言「どうしたらいい？」とぼつりと零した。私はその問いに対して、何と答えるべきか悩み、言葉に詰まってしまった。いつも解いている模擬試験だったら『アドバンスディレクティブはありましたか？』なんて選択肢を選べば正解するだろう。しかし、現実に今日の前にいる母親は、そんな答えを求めていないように思えた。「わからないけど、お母さんが決めたならおばあちゃんはわかってくれるよ。」必死に考えた結果、私はそう答えて、続けて先ほどの看護師の説明を含めた、看護に携わる者としての知識と、一人の家族としての思いを、ただ思いつくままに伝えた。その時の私は、どちら側の人間にもなりきれず、中途半端な立ち位置からでしか母の問いかけに応えられなかった。第三者としての冷静な視点でもなく、家族として母や祖母に寄り添った姿勢でもない、そんな取り留めのない話を、母は頷きながらただ聞いていた。そして一時間ほど黙って祖母の顔を見た後、麻薬の使用の意思を看護師に伝えた。麻薬を投与された祖母は呼吸が落ち着き、徐々に弱くなった後、そのまま翌日の早朝に息を引き取った。医師の死亡確認を受けながら、母は「私が死なせたみたい。」と隣で言った。

あの時の母の問いかけに、何と答えるべきだったのか、今でも考えている。あれから看取りの場面に立ち会うことはなかつたが、模擬試験や参考書ではいくつものそういった事例について考え、最適だと思われる『対象に寄り添った』答えを出してきた。しかし、どれもあの時の返事として納得できそうなものはなかつた。もちろん、対象となる人は全員違う人間なのだから、全員に共通する正しい答えなんてないのだろう。だが、対象を家族のように思って寄り添う姿勢が必要だといわれる度に、あの場面を思い出し、胸が締め付けられる。母のような思いをする遺族がもう二度とないように、どうしたら良いのか考え、実践していくことが、私の看護師としての生涯の課題になるのではないかと思う。